

三橋敏雄の戦争俳句

―遠山陽子「評伝三橋敏雄―」したたかなダンディズム」を読んで―

梶原 宣俊



一、はじめに

三年前、七二才から老後の趣味として気楽に俳句を始めた。二〇一八年、出水市文化協会理事の新年会でたまたま隣に座っておられた夕鶴俳句会主宰の白男川孝仁さんにお会いし、入会を勧められ即始めた。さらに白男川さんが能謡曲に関心をもっておられると聞き、謡曲を教えることになった。私は二十五年前に喜多流の能楽師に出会い、やはり老後に備えて喜多流謡教士の免状を取得し、十数名の方々に教えてきた。その能謡曲と俳句の深い

関係を知り、正岡子規や高浜虚子の句を参考にして「能謡曲と俳句―日本語の美しさを味わう」(出水郷土研究三十号 2020年)を書いた。

毎月一回の俳句会が楽しみで毎日俳句を作り始めた。二年間で二千句ぐらい作ってきたが納得のいくものはごく少数であった。十七文字で自分の思いや考えをわかりやすく述べただけのものである。これじゃだめだと思いい二〇一八年からユーキャンの通信講座を受講し、NHK俳句講座で基本を学んできた。そして二〇二一年六月号で、岸本尚毅の「俳句と想像力」の講座で初めて三橋敏雄の俳句に出会った。それは「戦争にたかる無数の蠅しずか」であった。

さらに句集「畳の上」から

- ・戦争と畳の上の団扇かな
- ・戦前へ年改まる闇の中

・戦前の一本道が現るる

・永遠に兄貴は戦死おとうとも

・過ちは繰り返します秋の月

等を引用し、遠山陽子の「評伝三橋敏雄」を紹介していた。そして、「戦争とその犠牲者への魂鎮めは敏雄生涯のテーマであった」と述べていた。

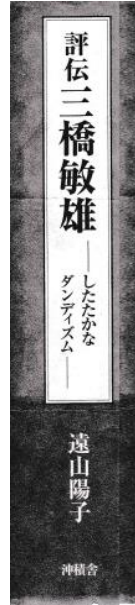
私は、これらの句に衝撃を受けた。私も戦争に関心があり、これまで戦争俳句を作り発表してきた。私のは「過ちは繰り返します原爆忌」である。この秋の月と原爆忌の差がプロと素人の差である。私は早速三橋敏雄に関心を持ち遠山陽子の「評伝」を読んだ。この本は、六三八ページの大著である。読んでいくうちに三橋敏雄の「戦争と海」の人生がはつきりと見えてきた。

私が戦争に関心を持ち始めたのは青春時代からである。私は敗戦の翌年六月に生まれ、

いわゆる団塊世代の最初である。生まれる直前まで続いたあの戦争のことが気になり近現代史を学び、文学思想を学んできた。

高校時代に太宰治の「人間失格」に出会い、その魅力にひかれ全作品を読んできた。太宰がああ戦争をどうくぐってきたかに関心があり二〇〇三年に「選ばれし者の悲哀とリリシズー太宰治の思想」(文芸社)として出版した。

大学生になると吉本隆明に出会い、やはりすべての著作を読んできた。その成果は「吉本隆明論―戦争体験の思想」(二〇〇四年新風舎)として出版した。そして二〇〇八年、これまで学んできた戦争の歴史と私の考えを「団塊世代の戦争論」(叢書見る)を出版した。定年後、鹿児島県出水市に住み着き、特攻碑や戦争遺跡に関心を持ち「戦争遺跡の会」や「平和ガイドの会」に入会し、活動を続けてきた。二〇一八年には戦争体験の聞き取り



遠山 陽子・著「評伝
三橋敏雄—したたかな
ダンディズム」（沖積
舎、2012年9月発売、
単行本、638ページ）

調査に参加し「出水の戦争体験談集」（出水市発行）として発行された。

私には、三橋敏雄は俳句界の吉本隆明に思えてきた。ご健在であれば、東京まで会いに行つただろう。

遠山陽子の評伝は実に詳細で、九年かけて三橋敏雄の生涯を余すところなく伝えている。その執念と愛情に頭が下がる。それほど三橋は魅力的な俳人であったということであろう。

二、三橋敏雄の生涯

ここでは、私なりに三橋の生涯と業績を簡潔に要約し、戦争にこだわった経過を追つてみたい。

三橋敏雄は一九二〇年（大正九年）東京八王子市で生まれた。吉本より四歳年上である。三歳の時、関東大震災が起き、大正デモクラシーが盛んな時代でもあった。しかし時代は恐慌と軍国主義が忍び寄っていた。一九二五

年（大正一四）治安維持法と普通選挙法が公布された。この相反する法律の公布は激動の昭和時代と日本の運命を暗示していたと遠山は述べている。

一九三五年（昭和十年）一五才の敏雄は、師範学校の試験に合格したが、東京堂書店に就職した。敏雄は後年、軍部のお先棒をかつぐような教師への疑いを持っていたと述べている。そして、教師ではなく俳人の道を選ぶことになる。

東京堂は現在のトーハンの前身で、実践商業学校等を設立し、社員教育やクラブ活動に力を入れていた。そして先輩の渡邊保夫から俳句部への入会を勧められる。俳句との出会いである。処女作は

窓越しに四角な空の五月晴れ
である。

敏雄は、これが入選していなかったら俳句

はやめていたかもしれないと後年述べている。やがて敏雄は新興俳句の山口誓子や渡邊保夫、水原秋櫻子の句に感動する。新興俳句運動には、時代の閉塞と市民たちの鬱積した心情が存在した。

・一九三七年（昭和十二年）十七歳

敏雄は、渡邊白泉に師事し俳壇デビューを果たす。そして、いよいよ戦争俳句に取り組む。時代は満州事変が勃発し、盧溝橋事件が起きていた。西東三鬼は、戦争俳句と無季俳句を「京大俳句」で展開した。敏雄も戦争俳句五十七句を発表した。それを渡邊白泉、山口誓子が絶賛した。

・一九三八（昭和十三年）十八歳

戦争俳句五十七句を「風」に掲載、俳壇デビュー

西東三鬼に出会う。

・一九三九年（昭和一四年）十九歳

十九歳の敏雄は東京堂を退社し、西東三鬼に師事する。敏雄は常識的な人より強烈な個性を持つ人を好み、三鬼の破滅的な性格の魅力にひかれた。まるで太宰治である。

・一九四〇年(昭和十五年)二十歳

「京大俳句弾圧事件」「新興俳句弾圧事件」が起きる。西東三鬼は逮捕され翌年には一斉検挙が行われ、新興俳句は終焉を迎える。敏雄は、国家権力への怒りと恨みを終生忘れることはなかった。

敏雄は「趣味化してしまった俳句のための俳句作業は停止すべきだ」と述べている。私はショックを受けた。

・一九四三年(昭和十八年)二三歳

太平洋戦争における敗色が濃くなる中、敏雄は横須賀海兵団に入団、十一月には発病入院する。

・一九四四年(昭和十九年)二十四歳

鎌倉吟行を実施する。

・一九四五年(昭和二十年敗戦)二五歳

八王子空襲を体験し、敏雄は自転車復員する。

敗戦を恨みよるこび十三夜

・一九四六年(昭和二十一年)二十六歳

渡邊白泉らと再会し、歌仙「谷目の巻」発行

三月、敏雄は運輸省航海訓練所に採用され、練習船黒潮丸の事務長として働き始める。三鬼と再会する。三鬼は「新俳句人連盟」が、日本民主主義文化連盟や赤旗に協力することに反対し分裂させる。

・一九四七年(昭和二十二年)二十七歳

敏雄は、三鬼らの「天狼」参加を拒み、「壺」の同人となる。

・一九四八年(昭和二十三年)二十八歳

太宰治が心中したこの年、敏雄は水原秋櫻

子の「馬酔木」に参加。「天狼」創刊。敏雄は黒潮丸、海王丸に乗り、帰還者引揚者の輸送に従事する。

・一九五五年（昭和三〇年）三五歳
ニューギニア、ソロモン群島に遺骨収集

骨を拾ひに来し地の蟬を掘りおこす

・一九五六年（昭和三一年）三六歳

ナホトカの引き揚げ者輸送

シベリヤを去る船欄の霜撫でて

・一九五七年（昭和三十二年）三七歳

敏雄離婚

沖に原爆太陽ふせぐ指に骨

・一九五八年（昭和三十三年）三十八歳

日本丸でビクトリア、バンクーバ航海

原水爆実験目撃

・一九五九年（昭和三十四年）三十九歳

四年前の遺骨収集の記録を「わが航海記そ

の一ジャパニハハ」として発表

・一九六〇年（昭和三五年）四〇歳

三鬼と師弟対談 十二月号「俳句研究」

・一九六一年（昭和三六年）四一歳

桜島一六句発表

火山灰墓の茶碗に沈す

現代俳句協会分裂

・一九六二年（昭和三七年）四二歳

三鬼没す。「断崖」終刊

・一九六四年（昭和三九年）四四歳

陸上勤務、再婚

・一九六五年（昭和四十年）四五歳

「俳句評論」に参加

・一九六六年（昭和四十一年）

第一句集「まぼろしの鱻」刊行

夜の虹ああ放射能雨か灰か（「戦争文学

全集」）

・一九六七年（昭和四十二年）四十七歳

現代俳句協会賞受賞

鬼赤く戦争はまだ続くなり

・一九六九年（昭和四十四年）四十九歳

評論活動増える、渡辺白泉死去

・一九七〇年（昭和四十五年）五十歳

銀河丸乗船、「俳句評論」一〇〇号記念に

「優雅な予測」執筆

「模倣、改竄俳句の再生産に精をだす作者

が多すぎる。俳句はすでに滅亡しつつある。

人間俳句はコンピュータ俳句に勝てるわけが

ない。」

・一九七一年（昭和四十六年）五十一歳

「西東三鬼全句集」刊行

・一九七二年（昭和四十七年）五十二歳

海上生活に終止符、平河会館支配人

・一九七三年（昭和四八年）五三歳

第二句集「真神」発行

鬼赤く戦争はまだ続くなり

・一九七七年（昭和五二年）五七歳

出版

第四句集、戦火想望俳句第四集「弾道」を

志那兵が銃を構へて来り泣く

「俳句研究」十一月号 三橋敏雄特集号

・一九七八年（昭和五十二年）五十八歳

平河会館退職、専門俳人になる

・一九八二年（昭和五十七年）六十二歳

全句集刊行

・一九八三年（昭和五八年）六三歳

俳句評論終刊

・一九八四年昭和五九年 六十四歳

「渡辺白泉全句集」刊行

戦争にたかる無数の蠅しづか

・一九九九年（平成十一年）七九歳

作品発表を中止

二〇〇〇年（平成十二年）八十歳

二〇〇一年（平成十三年）八一歳

十二月一日 没

二、三橋敏雄の戦争俳句

三橋敏雄の生涯を簡単に振り返ってきたが、あらためて三橋が俳句と戦争に深くこだわってきたかが明白である。敏雄にとつて戦争と俳句は命そのものである。やがて戦争の記憶が薄れ、戦争体験者がいなくなるだろう。我が国の浅薄なマスコミはすでに昭和三十年代に「戦後は終わった」と述べていたが、三橋敏雄をはじめ一部の人々は戦争にこだわり、戦争について考えてきた。私のような戦後世代にとつてもいまだ戦争は終わっていない。

「平和ボケ」と言われて久しいが、あの悲惨な大戦争の意味を問い続けることは、多くの戦死者に対する義務である。

その意味で三橋敏雄の戦争俳句は私たち戦後世代にとつても貴重な教訓であると言つていい。戦争体験のない私たちに戦争の本質、真実を迫体験させてくれる。ここで改めて私

の共感した戦争俳句を一部掲載したい。

- ・ あを海へ煉瓦の壁が撃ちぬかれ
- ・ 射ちきたる弾道見えずとも低し
- ・ 砲撃てり見えざるものを木々を撃つ
- ・ 暁の敵前渡河の天をいかる
- ・ 戦車ゆきがりがりと地を掻きすすむ
- ・ 塹壕の夜も土匂ひ兵ねむる
- ・ 機関銃隠れ噴きつつ日落ちたり
- ・ 戦争の路地づたひゆき角に照る
- ・ 戦友の血飛沫を見る火線なり
- ・ 海みゆる馬に兵士は乗りそこなふ
- ・ 山を越へ河超え弧り戦死せり
- ・ 遺骨抱く白きうなじに遭ふ再び
- ・ 軍隊行く街に群衆の人立たす
- ・ 招魂祭皮膚に埃ふり花火降る
- ・ 九段の夜こもる馬啼き人黙る
- ・ 出征ぞ子供等犬は歓べり
- ・ 三年ごし帰還兵暑し天の河

- ・戦争はうるさし煙りし叫びたし
- ・地平より原爆に照らされたき日
- ・敗戦を恨みよろこび十三夜
- ・いっせいに柱の燃ゆる都かな
- ・骨を拾ひに來し地の蟬を堀りおこす
- ・彼我悲し戦跡の峰脚たらし
- ・シベリヤを去る船欄の霜撫でて
- ・沖に原爆太陽ふせく指に骨
- ・わが家になし絶滅の日本狼図
- ・夜の虹ああ放射能雨か灰か
- ・鬼赤く戦争はまだ続くなり
- ・飯白し八月十五日正午
- ・戦没の友のみ若し霜柱
- ・塹壕に支那の活字の書を瞥す
- ・酒を飲み酔ふに至らざる突撃
- ・戦前を鼠火花は苦しめり
- ・立ち目つむる戦亡の友よ夏の空
- ・大戦のかの日々を座し白き祖母

・敗戦の日の夏の皿いまも清し

・戦後即戦前永し夏の空

・戦争と畳の上の団扇かな

・戦争にたかる無数の蠅しづか

・戦前の一本道が現るる

三、三橋敏雄の俳句論

敏雄は、俳句の作り方についてあまり多くは語っていないが、

「評伝」の中からいくつかを列挙してみた。

*おおむね季題季語が表している現象の説明になっている。

あるいは、感想や所見になっている。そういう俳句は報告であり

「あ、そうかい」と言うしかない。そういう俳句を「そうかい俳句」という。そのひとつ上に「なるほど」という俳句」がある。

感動しなければ俳句はできないと言われ

ているが、人生そんなに感動しないものです。感動がないからこそ俳句を作って感動したいと思うのです。言葉というのは単語だとその意味しか通じないが、ある言葉と言葉の関係づけによつて思いがけない新鮮さを發揮してくる。あとはこれからどうしたら上手くなるかよく聞かれるが、それはまず才能、才能がないのに何年も無駄な時間を過ごすのはやめなさい。「俳句のやめ方」という本を書こうかと言ったことがある。

そして最後は念力です。吟行というのは景色を見に行くのではなく、言葉を探しに行くんです。発想は季語からしない。

また、言いすぎると味わいが少なくなる。*なぜ私は俳句を作るのかということをよく考えて答えを用意しなさい。

*俳句は生の刻々を定着する業。生の短さを痛感しないでよい俳句はあり得ない。

*言葉と言葉を関係づけて、新しい意味を発見できたときに、アタリと感動する。

*無意識の中に趣味化してしまつた俳句のための俳句作業を停止すべきことを教えられる。かけがへなく重大なる現代に生きる人間のひとりとして、私の深奥にはもつと明るい光源があると確信するとき、そこから生まれてくる未来性を、必ず後代に現実化しうる自信をもつて、厳正なる意味でのロマンチズムを、素朴に作品化し、肉体化しようと思ふ。

以上、三橋敏雄の俳句論を読み、私は真剣に俳句をやめようかと思つた。老後の趣味として気軽に始め、まったく才能もなく、三年で二千句ほど「そうかい俳句」という駄作を作つただけである。敏雄は一晚で三〇〇句創ることをやっていた。とてもまねできるものではない。

「俳句のやめ方」という本を出したいと書いているが、ぜひ出版してほしい。しかし、三橋敏雄に出会ってその生き方に共感し、俳句の凄さに目からうるこの体験をした今、やめるのも口惜しい。最も共感したのは、「感動するために俳句を創る」である。私は青春以来、知的好奇心旺盛で、評論や歴史を学んできた。感性が貧弱で、無感動な人生を歩んできた。「感動するために俳句を創る」という言葉に心から共感した。もうしばらく心を入れ替えて真剣に俳句に取り組んでみようと思いなおした。感動を味わうために。

さらに、敏雄の戦争俳句を詠み、「団塊世代の戦争論。パート二」を書きかけて五年間、そのままになっていたものを今年中に完成しようと思いい立った。

四、おわりに

敏雄の生涯は、俳句と戦争と海の生涯であ

った。敏雄は、俳句に命を賭け、戦争に反対するわけでも賛成するわけでもなく、戦争の事実を淡々と詠んでいる。それが戦後生まれの私たちの心に染み渡る。

あの戦争の傷はいまだに癒されることもなく宙に浮いている。

開戦、敗戦の原因、真実も未だ闇の中であり、多くの遺骨は海底に沈んだままであり、戦災孤児もまだ闇の中である。

今から考えれば、国が減びてもいいという「二億玉砕」をかかげ、日本自滅を賭けた政府国家の大戦争の総括は戦後七十六年たった今でも曖昧なままである。

敏雄の句はそれを問うているように私には思える。

私たち戦後生まれは、戦後復興と高度経済成長の中で、豊かな物質社会を享受してきた。しかし、世界の戦争は、未だに続いている。

日本もいつ戦争に巻き込まれるかわからない。私たちは、無数の戦争犠牲者を忘れることなく、「反戦平和の思想」を確固たるものにし、未だ世界中で戦争を続けている世界の現実の中で、生きてゆかねばならない。

戦争俳句は現在でも重要なテーマである。それが、三橋敏雄が生涯をかけて私たちに伝えたかったことであると信じている。

三橋敏雄 辞世の句

山に金太郎野に金次郎予は昼寝

(出水喜多会主宰)

【参考文献】

・遠山陽子「評伝三橋敏雄―したたかなダ
ンデイズム」

